

## 本地物語としての『三宅記』について

阿部 美香

## 一、壬生家旧蔵『三嶋大明神縁起』

現在、三宅島七島文庫に収められる『三嶋大明神縁起』<sup>1)</sup>(一卷、通称『三宅記』)は、三宅島の神主壬生家に伝えられた、伊豆国三嶋大明神の縁起である。壬生家は、三嶋大明神やその後、王子などの三宅島の神仏を奉斎し、その信仰の中心となる御笏神社、富賀神社、薬師堂の、いわゆる二社一堂を管理する神主であり、さらには地役人として島政を預かってきた家柄である<sup>2)</sup>。

和文体で編まれた同縁起とはほぼ同じ内容のものが、三宅島の他に新島、大島、神津島などの伊豆諸島の島々や、静岡県下田市白濱に鎮座する伊古奈比咩命神社、三島市の三島大社などに、『嶋々縁起』、『三宅記』、『三嶋白濱嶋々大明神御縁起』、『三宅嶋薬師縁起』など、様々な名称で伝存している<sup>3)</sup>。このうち、新島の神主前田家に伝わる『嶋々縁起』<sup>4)</sup>(仮題)には、文明十三(一四八一)年の奥書があり、壬生家旧蔵『三嶋大明神縁起』とともに貴重な資料といえる。とりわけ、壬生家旧蔵『三嶋大明神縁起』は、三嶋大明神の最初の奉斎

者である壬生御館<sup>5)</sup>の末裔といわれる壬生家に伝来した写本であり、卷子本の形態を有していることから、原本にもっとも近い機能と資料的価値を保ち伝える資料と位置づけることができる。

幸いにも、壬生家旧蔵『三嶋大明神縁起』を披見することができた。『三嶋大明神縁起』は、その内容が熊野御本地絵巻などの室町時代に流行する御伽草子に似ており、本地物の一つであるとの指摘がある<sup>6)</sup>。しかし、南伊豆や伊豆諸島における神社及び神道史研究において、本地物としての価値は検討されず、むしろ本地垂迹思想の許に、本地を薬師とする三嶋大明神の神々の体系を示した仏教的な縁起として読み解かれてきた<sup>7)</sup>。先学の驥尾に付しつつ、改めて『三嶋大明神縁起』の機能とその物語構造を見るならば、後述のように、『三嶋大明神縁起』は公式的縁起の機能をもっており、その物語構造は、いわゆる本地物語にはかならない。したがって、その資料的な価値を、本地物語としての視点から改めて問い直す必要がある。

そこで、本稿では、『三嶋大明神縁起』の資料的価値を再検討するための前提となる基本作業として、『三嶋大明神縁起』の内容構造が本地物語の構造を有することを改めて明らかにしたい。その上で、その資料的な機能や価値についての若干の考察を加えてみたい。なお、最古の伝本であり、最も原型を伝えるとおぼしい壬生家旧蔵『三嶋大明神縁起』をもとに論を進めることとし、表現の混乱を避けるために、以下において、『三宅記』の通称を用いることとする。

## 二、『三宅記』の物語構造と本地物語

本地物語は、唱導文芸として発達したといわれ、南北朝時代頃に成立した『神道集』には、多くの本地物語が収録されている。本地物語には、釈迦が前生の菩薩時代に衆生を救ったという釈迦本生譚（ジャータカ）の形式を前提とする普遍的な物語構造がある。その構造は、今ここに鎮座する神仏は、(一)かつてその前生では人として生を受け、(二)様々な衆生の善悪を体験して、(三)神仏の加護を得て神仏となった、という三段構造<sup>8</sup>から成っている。このことについては、荒木繁氏が指摘している。このような物語構造の上に、貴種流離譚や継子いじめ譚といった物語伝承のモチーフが組み込まれ、本地物語はそれらが重ね合わされた構造を取ることが多い<sup>9</sup>。その場合、①神仏の申し子として生まれた主人公は、②実母の死によって継母を迎え、やがて、③継母の迫害を受けて追放、または逃亡、または殺害という苦難を体験する。しかし、④実母の加護を受け、或いは神仏などの救済を受け、⑤王子または姫に出会い幸せな結婚をする。或いは、肉親と再会し、⑥機縁の上人を得、或いは「神道の法」〔『神道集』に見られる〕を授かって、⑦神仏として現れる、といった具合に物語が語られ、神仏の本地と垂迹の関係が明らかにされる。例えば、伊豆と箱根の権現の本地物語である『神道集』所収「二所権現事」の物語を見ると、以下のように、典型的な継子譚のモチーフを持った本地物語の構造を見ることができるといえる。

伊豆、箱根の権現は、かつては天竺斯羅奈国の中将とその姫君達であった。むかし、中将夫婦のもとに、観音の申し子として主人公である常在御前が生まれた(①)。やがて実母が死に、継母が迎えられ、常在御前に靈鷲御前という義妹ができた(②)。継母から迫害を受けた常在御前は、様々な苦難に出合う(③)。しかし、そのたびに亡き母や神仏、靈鷲御前の加護を受けて苦難を乗り越え(④)、波羅奈国の王子と出会う姉妹ともに幸せな結婚をし、出家して姉妹を捜していた父中将とも再会する(⑤)。やがて皆で日本へ渡って伊豆と箱根の神となり、機縁の上人に会って(⑥)権現として現れ、追ってきた継母は石神と化したという(⑦)。

さて、『三宅記』の物語構造を見てみると、その特徴として、大きく三つの物語によって構成されていることが挙げられる。第一部は、三島大明神の天竺から日本への渡来と島焼き出し(噴火による島の生成)の縁起。第二部は、「ここに一つの不思議あり」として、三島大明神による大蛇退治の物語。第三部は、「爰にまた一つの不思議あり」として、うど濱で天女の舞(東遊、駿河舞)を習得した壬生御館による三島大明神の奉斎と大明神の本地垂迹の物語である。それぞれの物語のあらましは、次のようである。

三島大明神は、薬師如来の申し子として天竺の帝王の王子という貴種の身分に生まれた。王子は、七才の時に実母を亡くしたものの美しく成長し、継母から思いを寄せられるようになる。しかし、継母の思いを受け入れなかったため、継母は帝王に讒言し、王子は国

外に追放された。天竺、唐土、高麗と流離の果てに日本に渡った王子は、富士の禪定において、神明から伊豆半島をもらい受けた。そして神明に諭され、父の勘当を解くために天竺へ帰国する。無実が認められた王子は、恒河川に沈められて不孝の罪で蛇体と化した王子と対面し、その王子の姿である薬師の尊体を得て日本へ帰った<sup>(10)</sup>。その航海の途次、丹波の翁に王子が本地を薬師とする三島大明神となることを予見され、翁と姪の子である見目<sup>みめ</sup>、若宮、劔御子を家来に譲り受け、たみの実をもらった。その後、再び富士山で神明と対面した王子は、伊豆の海を与えられ、日本国の守護神となるように告げられた。王子は、伊豆の海に島を焼き出すべく、見目たちに命じて神々を集め、「三島大明神」としての垂迹の姿を顕し、雷神、竜神らの力を借りて伊豆諸島を造島した。明神は、見目に后を探させ、五人の后を島々に置いた。(以上、第一部)

ある時、箱根の芦ノ湖で翁が釣りをしていた。しかし、あまりに不漁のため、魚が捕れれば三人の娘のうち一人を差し出すという誓約をしてしまう。翁の願いを聞き入れた竜神は、三女をもらう約束を遂げようと、翁の家にやって来る。そこで、三女は鳩となつて富士山へ逃れ、身を隠していたところを三島大明神に見つけられた。事情を聞いた明神は、三宅島に娘を隠し、見目、若宮に相談した。見目は、三女を追ってきた大蛇を誘い出して、酒御子と飯御子が酒と飯でもてなし、酔ったところを劔御子や王子たちが斬りつけ成敗した。このとき、大蛇が振り回した尾が、王子の戦いを見に来てい

たみとの口の後の目に当たり、后は片目をつぶしてしまった。大蛇退治の後、明神は躑躅の間に隠れていた三女と、他へ逃げていた二人の娘を捜し出し、三人姉妹とともに后としたという。(以上、第二部)

ある時、明神は富士で壬生御館に出会った。御館は天人から東遊・駿河舞という伎芸を習得した人物であった。御館は神々が造った島を見ようと明神に付き添って三宅島に渡来し、明神の命を受けて築地を築き、鰹釣りを行った。やがて、垂迹の時を迎えた明神は、壬生御館に自らの奉斎を命じ、五百年後に日本の守護神となることを宣言して、司祭者の証である石の笏を託して、本地を顕わし垂迹する。御館は子息実正(政)に、東遊、駿河舞の技を教え、明神は実成に龜卜の技を教えた。御館が本国へ帰って以後は、代々壬生御館の子孫が明神を奉斎したという。(以上、第三部)

以上が、『三宅記』の概略である。これを、本地物語の構造と照らし合わせて見てみると、第一部の物語には、①天竺の帝王の申し子として誕生した貴種が、②七才の時実母を亡くし、やがて③横恋慕した継母の讒言によって、国外に追放されるといふ苦難に遭い、流離するが、④神明の加護を受けて救済され、神としての姿を顕わし、⑤后を捜し出して得るといふ、一連の物語構造があることが分かる。

続く第二部の物語は、素盞鳥による大蛇退治の神話やその後日譚である日本武尊の物語と、そのモチーフを共有している。本地物語

の構造においては、第一部における⑤后探しの物語とともに、明神が美しい后を得るための后探しとその結婚の物語として位置づけることができよう。美しい妻を娶うことは、王（またはそれに準じる者）となる者が兼ね備えるべき条件の一つであった。また、三国を伝来して日本に渡来した三島大明神にとって、在地神である蛇を退治することは、伊豆半島並びに伊豆諸島の主となる神としての地位を獲得することになる。本来、蛇神の妻となるべき三女が三島大明神の後となることで、地主神から渡来神への交替が劇的になされたと解釈できる。箱根の翁の娘の存在は、折口信夫が説くところの「神の嫁」として、地主神の交代を促し、富士を頂点とする新たな神々の体系を作り出す役割を担っていたともいえる。

その上で、第三部の物語は、本地物語の構造の最終段階である⑥神が機縁の上人と出会い、⑦本地垂迹の神として顕れる、という重要な場面を含んでいる。第一部において神明から日本の守護神となるよう告げられた三島大明神は、富士山において東遊、駿河舞の伝承者である壬生御館と出会う。明神は、壬生御館を自らの司祭者として、神明との約束通りに本地を葉師とする三島大明神として顕れるのである。

このように、第一部から第三部までの物語は、それぞれに起承転結を持つ因縁の物語が独立して語られている。その上で、第一部、二部、三部の物語全体を通して見てみると、そこには本地物語を構成する全ての過程（段階）が含まれているのであり、一見独立した

個々の物語は、本地物語の構造においては統一され、『三宅記』という一つの物語として完結していると見られる。

### 三、公式的縁起、秘書としての『三宅記』

このような『三宅記』の特徴の一つとして、神と仏の関係が明らかにされる第三部において、代々の壬生家神主に継承される東遊、駿河舞の詞章や亀卜の技（占形図）、服忌令などが具体的に記され、「御代官」として明神を奉斎する由来を詳しく説いていることが挙げられる。廣瀬氏はこれについて、『三宅記』が壬生家のために書かれた壬生家の由来記であると指摘する<sup>12</sup>。さらに付け加えるならば、『三宅記』は、壬生家代々の神主に、秘伝の書、すなわち秘書として継承されるものであったといえよう。それは、『三宅記』の中に、神主の掌る神事としての東遊、駿河舞の詞章とともに、亀卜のための積文が、具体的な占形図を伴って記されているところに明らかである。亀卜は、一子相伝の秘伝という性格を持っている。したがって、託宣に対する解釈の方法を具体的に記す『三宅記』は、他に披見を許さない秘書であったと考えられる。このような秘伝の技をもって神に仕える壬生家が奉斎する、その三島大明神の始源や本地と垂迹の関係を、本地物語の構造を用いて説きあかした縁起が『三宅記』なのである。

さらに、秘書としての『三宅記』は、内陣に安置されるものであったようである。昭和二五年に壬生本『三宅記』を書写した大島波

布比咩神社宮司松本國次郎氏は、それを同神社の内陣に安置したという。<sup>(13)</sup>このことは、『三宅記』が、もともと内陣に納められるべき性格の書として認識されていた事実を示すものとして注目される。

三橋氏は、波布比咩神社の実例や、『三宅記』が他見を許さない書としての口碑があることなどから、壬生本『三宅記』は本来三宅島神着の御笏神社内陣に納められていた、所謂、内陣本ではないかと指摘している。<sup>(14)</sup>御笏神社は、三島大明神の後（八王子母御前）の祀られる社であり、かつて小鏡を嵌め込んだ古笏を神体としていた。<sup>(15)</sup>

『三宅記』には、三島大明神が、恒河川に沈められ蛇体と化した王子の本体である薬師の尊体を入れ込んだ石の笏を所持し、垂迹するときに壬生御館に「手しるし」<sup>(17)</sup>として授与したことが記されている。縁起に由来するであろう古笏が、御笏神社の神体であることは極めて興味深い。また、廣瀬氏は、『三宅記』が『三宅嶋薬師縁起』とも呼ばれること、『南方海島志』（寛政三年、秋山章）に、薬師堂に旧記一卷が納められていたという記録があり、旧記が『三宅記』と推測されることから、もともと『三宅記』が三宅島の伊豆村薬師堂に納められていた可能性を指摘している。薬師堂は三島大明神の本地堂であり、富賀神社の境内にあって、薬師堂と富賀神社は本地堂と垂迹の神の社という表裏一体の関係にあったという。<sup>(18)</sup>

『三宅記』が内陣本であるならば、本地物語としての『三宅記』は、三島大明神の公式的縁起として機能するものであったと指摘できる。内陣に納められるということは、神体―本尊と同格のものとして扱われていたことを意味する。『三宅記』は、神体と一具のものとして、三島大明神の世界を具現する祭祀の「装置」として機能する書であったのだ。神社や祠、内陣に納められる神像や三宅島の人々、その草木に至るまで、さらには伊豆諸島や伊豆半島をも含み込んで、それらが三島大明神の世界に由来し、属するものであることを、『三宅記』は説きあかしているのである。

このような機能と性格を有する『三宅記』は、壬生家のもとで編まれたと考えてよいと思われる。<sup>(19)</sup>『三宅記』には、同書が、三島大明神の眷属神である若宮と奉斎者である壬生御館によって記されたものであることが記されている。『三宅記』の三島大明神に関する記述には、仏教や修験の物語の要素が所々に見られ、それらが全体として三島大明神という神の性格を作り上げている。壬生家神主は、「島の内預かり殿」<sup>(20)</sup>として三宅島の祭政の頂点にいて、氏子をはじめとして、顕密僧、修験者たちの信仰を集めた三島大明神を奉斎していた。したがって、三島大明神に関するあらゆる伝承が、古今を通じて、神・仏（顕密僧、修験者）などの立場を超えて、壬生家のもとで『三宅記』として編纂され、三島大明神の縁起として成立したと考えられる。そしてその成立は、およそ鎌倉時代にまで遡ると見ることができるといえる。<sup>(21)</sup>

#### 四、『三宅記』の性格とその機能

本地物語としての『三宅記』の存在は、本地物語そのものの生成

と機能を、唱導文芸としての本地物語の機能とは別の次元から考える手がかりとなり得るものであろう。それは、『三宅記』が、中世の三島大明神の神々の由来と、その奉斎者である壬生家が継承した儀礼、祭祀の技といった信仰の世界が本地物語をもって全円的に語り出され、公式的縁起として機能するものであったからである。

『三宅記』には、「神は本地をあらはし申を御喜あり」と記されている。これは、本地物語の常套文句であるが、降臨する神に対してその本地を言祝ぐ機能を果たしたであろう『三宅記』には、神社縁起、あるいは、本地物語の本来のあり方が、反映されていると思われるのである。

中世において、三島とともに「二所三島」と呼び慣わされた霊地の一つである伊豆国走湯権現の縁起には、代々の別当のもとに授与される公式的縁起として、『走湯山縁起』があった。『走湯山縁起』には、氏人上首（別当）に継承される秘書としての『走湯山秘決』が備わっている。漢文体で記された『走湯山縁起』には、本地を手観音とする走湯権現が、賢安上人を機縁として顕現したことが記されている。一方、和文体で記された『走湯山秘決』は、神として祀られる走湯権現の神仏習合した姿を、視覚的に描き出しているのであって、神と仏が一体となった権現の深秘の姿を伝えている。『走湯山縁起』は、秘書である『走湯山秘決』と一具として伝えられることによって、初めて走湯権現の世界像を現す縁起として機能するのである。<sup>22</sup>そして、『走湯山秘決』に用いられた浄土巡りの語

りは、古くは天神縁起の基盤となった日蔵の六道巡りや『富士の八穴』のような唱導文芸に共通する構造であった。

このような『走湯山縁起』の存在を念頭に置きつつ、『三宅記』について考えるならば、三島大明神の本地垂迹説に基づく縁起が、『平家打聞』（一三三三年頃成立か）、真名本『曾我物語』（一四世紀後半から一五世紀後半にかけて成立か）、『佛神一鉢灌頂鈔附三所三嶋參詣』（室町中期頃成立か。叡山文庫天海蔵）、『神明納受法花事 松尾明神事、三嶋大明神本地事』（室町時代写。金沢文庫蔵・金沢称名寺寄託聖教）など、東国で成立したと思しい唱導書および物語テクストに収録されていることが想起される。ここでは、三島大明神は薬師と大通智勝仏の二つの本地仏を持つ神として語られており、伊豆諸島を焼き出して鎮座した三島大明神が、機縁の上人のもとで本地垂迹の神として顕れたという縁起とともに、三島大明神とその后や王子、眷属神などの本地が示され、神々の世界が体系的に現わされている。これらのテクストの縁起説は、いずれにも共通した語りの型があつて、当時、三島大明神の公式的縁起としての漢文縁起が、三島大社に存在していた可能性を推測させる。走湯権現や三島大明神の公式的縁起に、秘書として付属し、或いは対応する縁起において、なぜ本地物語や浄土巡りが語られ、しかも仮名で表記されるのか。『神道集』『二所権現事』或いは『三島大明神事』に見られる本地物語との位相の違いを含めて、今後の課題としてゆきたい。

また、『平家打聞』や真名本『曾我物語』などに記された三島大

明神の世界と『三宅記』の神々の体系は無関係ではなく、奉斎者を異にしながらも共通する世界像を有している。『神道集』『三島大明神事』には、伊豆国三島大明神と団体であるところの伊予国三島大明神（本地は大通智勝仏）の本地物語が収録されているが、『三宅記』と『神道集』所収の本地物語が語る伊豆国三島大明神の世界像は、『平家打聞』や真名本『曾我物語』などのテクストに記された三島大明神の縁起説を介して結びつく。三島大明神の世界像を説き明かすためには、それぞれ位相の異なるこれらテクストに記された三島大明神の性格を、総体として考える必要があるだろう。

三島大明神が、鎌倉幕府という東国における王権を守る霊地としていかなる機能を期待された存在であったか。また、二所権現の世界と併せて、新たな王権を支える神話をいかに成り立たせ得たのか。それは、『三宅記』の成立そのものの問題とも、深く関わる問いである。中世における伊豆三島大明神の世界像や本地物語としての『三宅記』の具体的な諸問題については、改めて論じたい。

本論文では、伊豆国三島大明神の唯一の公式的縁起と認められる『三宅記』について、本地物語としての構造を改めて明らかにしようとして試みた。それは『三宅記』が、三島大明神の信仰世界を物語るだけでなく、ひろくは本地物語の成立や定義それ自体に対し、新たな視点を提供する縁起書として、貴重な資料であると考えたからである。

注

(1) 壬生家旧蔵『三嶋大明神縁起』の翻刻は、三橋健氏「三嶋大明神縁起」（『國學院大学紀要』第一六巻、昭五三・三）に収録されている。

(2) 二社一堂と壬生家神主の関係については、廣瀬進吾氏『三宅島の神事芸能』（昭五五・三、三宅村教育委員会）、同氏『三宅島史考』（昭六二・四、三誠社）参照。『三宅島史考』は『三宅記』に関する総合的な研究書でもある。廣瀬氏の報告によれば、伊豆村薬師堂について、『三宅島年代見聞記』（浅沼元右衛門）に、「壬生家系二長元五年申年、壬生右衛門薬師堂満願寺ヲ建ト有リ、（略）毎年正月八日神主社人ニテ祭事ヲ行ウヲ例トス。壬生家持ニテ、別当ハ神主壬生家別家壬生市右衛門也」という記事があり、薬師堂は壬生家持で、別当を壬生家の分家が務めていたことが知られる。また、薬師堂にある薬師如来像（江戸時代）には、その体内に藤原時代の仏像の頭部が納められていた。

(3) 『三宅記』の伝本については、注(1)三橋氏前掲論文、及び注(2)廣瀬氏前掲『三宅島史考』に、それぞれ調査報告がある。

(4) 新島前田家所蔵『鳥々縁起』の解説および翻刻については、注(1)三橋氏前掲論文、本田安次氏『東京都民俗芸能誌』下巻（昭六一・一、錦正社）に収録されている。

(5) 紙高三〇糎。料紙は斐紙。巻頭巻末ともに無し。本紙はすべて糊離れしている。黄土の界線は、紙継ぎが本文に当たらないように配慮して記されている。かつて赤地錦製の袋で包まれた上で、紺地の綾の袋に納められていたといい、いかに大事に書写・継承されたものであるかが偲ばれる。

(6) 『伊古奈比咩命神社』(昭一八・一〇、伊古奈比咩命神社々務所編)では、『三宅記』を本地物の一つと紹介する。また、注(2) 廣瀬氏前掲『三宅島史考』によれば、二木順氏の『三宅記』に関する報告書、及び海老名雄二氏の「三宅記物語」には、これが熊野御本地絵巻などの御伽草子に似た内容を持つことが指摘されている。両論考については残念ながら未見である。

(7) 浅沼悦太郎氏「火の島の記録(四)」(『民間伝承』通巻二九六、昭四七・一一)、『神道体系 神社編』十六、駿河・伊豆・甲斐・相模国(昭五五・三三)所収解題、『式内社調査報告』第十卷東海道5(昭五六・一、皇學館大學出版部)所収「伊豆三嶋神社」三橋健氏解説、土岐昌訓氏「三島大明神縁起の成立背景」(『神道宗教』一〇五号、昭五六・一一)。

(8) 本地物語の三段構造については、荒木繁氏「中世末期の文学」(『岩波講座 日本文学史』第六卷(旧版)所収、昭三九・四、岩波書店)を参照した。

(9) 継子いじめ譚の構造については、阿部好臣氏「継子いじめ

譚の構造」(『国文学 解釈と鑑賞』第五六卷一〇号、特集物語の構造—古代・中世、平三・一〇)を参照した。

(10) 不孝の罪で蛇と化した王子とは、三島大明神自身の、もう一人の姿であったと思われる。継子いじめの物語では、継母による主人公の追放、または殺害が行われる。『三宅記』では、追放された王子が国に戻り、恒河川で出会った王子の話として、継母に殺害され蛇体と化した王子の物語が記される。蛇体の王子は、父を薬師とし、天竺の父の王の御内の女房の御腹にて生まれた王子であるとして、あたかも三島大明神とは別の王子であり、三島大明神の子供であるところの王子とも解釈できる説明を施している。しかし、物語の構造から考えるならば、継母の讒言によって一方では流離という苦しみを味わった王子と、一方で継母に殺害され、不孝の罪によって蛇体と化して苦しむ王子が、共に別の次元において現れたという解釈もできる。その二人の王子が対面し、蛇体と化した王子から父の勘当を解かれた王子に、分身ともいえる薬師の尊体が授与されることで、二人の王子が一体化されるのである。

(11) 転輪聖王(世界統一をする聖王)が具える七宝の一つに「玉女宝」がある。

(12) 注(2) 廣瀬氏前掲『三宅島史考』、一〇八―一一一頁。

(13) 『式内社調査報告』第十卷東海道5(昭五六・一、皇學館



大學出版部) 所収「波布比賣命神社」土岐昌訓氏解説。

(14) 内陣に安置された公式的縁起の例としては、住吉大社蔵

『住吉大社神代記』(九世紀後半から十世紀末頃の成立)、北野天満宮蔵『北野天神縁起』(通称『承久本』)がある。

(15) 注(1) 三橋氏前掲論文。

(16) 『伊豆国附三宅島神明帳』(明治四年)には、「神着御笏神社 祭神事代主命御神璽、古笏ニ小鏡ヲ嵌込有之候(略)」

とある。渡辺安麿氏「伊豆国島々の式内社(下)」(『式社のしおり』第一六号、昭五五・五)参照。御笏神社の古笏については、注(1) 前掲書所収「佐伎多麻比咩命神社」三橋健氏解説に詳しい。

(17) 「手しるし」とは、一般にいう手印しゅいんのことであろう。「手しるし」として、神の本地である薬師の尊体が入った石の笏が、明神から壬生御館に与えられることによって、それが、壬生御館が明神の正統な御代官であることの証明となったものであろう。

(18) 注(2) 廣瀬氏前掲『三宅島史考』、一〇二―一〇六頁参照。

(19) 作者については、従来僧侶説、修験者説があった。例えば僧侶説は、石井廣夫氏『神祇古正伝』(昭八・一〇、建設社)、注(7) 土岐氏前掲論文等に見え、修験者説は廣瀬氏注(2) 前掲『三宅島史考』等に見える。

(20) 室町時代に成立したとおぼしい三宅島神楽歌の中に、壬生家神主が「島内預り殿」として登場している。

(21) 三橋氏(注(1) 前掲論文)、浅沼氏(注(7) 前掲論文)によれば、壬生本はその紙質などから、それぞれ室町時代中、末期の書写であるとし、三橋氏(注(7) 前掲解説)はさらにその成立を鎌倉時代末期と指摘している。これに対し、土岐氏(注(7) 前掲論文)は、その成立を一五世紀中葉とし、また廣瀬氏(注(1) 前掲『三宅島史考』)は、平安時代に遡る可能性を指摘している。壬生本の書写年代について、愛知学院大学教授福島金治先生から、「影印の上では一四世紀終わりから一五世紀中ごろに書写されたものと見られる」という御示教を得た。その上で、書写者が、書写技術の極めて高い能力の持ち主と思われること、またその書体の中に、たとえば「后」という文字に法性寺流の筆づかいの残照が見られることから、原本が法性寺流の書体をもって書かれていた可能性があること、もし関東で法性寺流をもって書かれたのであればその成立は一二七〇年以前のものであることなどのお教えをいただいた。

(22) 鴨志田「走湯山の縁起『異域の神人』走湯権現と『根本地主』白道明神・早追権現をめぐって」(『国文学解釈と鑑賞』第六三卷一二号、平成一〇年一二月)、「走湯山縁起の表現と世界像―『走湯山縁起』『走湯山秘決』を中心に」(『説話文

『學研究』第三四号、平成十一年五月。

付記

本論文は、昭和女子大学文化史学会第三回大会（平成十一年六月二六日）において口頭発表したものの一部です。席上その他におきまして、様々な御教示を賜りました諸先生方、壬生本の書写年代について御教示を賜りました福島金治先生、また貴重な資料を御提供下さいました浅沼和男先生、廣瀬芳先生に、心から感謝申し上げます。

オーセンティシティをめぐるホストとゲストの比較  
—アラスカ・トリニンギットの観光から—

勝間田 美奈子

### 一、問題の提起

遙か北の大地へ「本当の文化」を求め、「伝統的」な民族衣装を着た先住民のパンフレットを握り締めたある観光客は、それがパンフレットのなかの世界でしかないと現地で悟った。そして、「どれ」が本当の文化なのか考え始めた。果たして、「本当の文化」とは、誰もが同じ捉え方をするだろうか。

観光の場合は、「誰」の視点から、「何」をもって文化の本質性を決めることができるのか、とサラマウンが述べるように、「文化」そのものの問題を提示している。これまで文化の捉え方は、一元的で固定的なものとするきらいがあった。これに対しサラマウンは、文化とは決して同種類の巨大な一枚岩の概念ではなく、さまざまな文脈の意図に応じた文化要素の選択によって文化の捉え方は異なってくるものとして、文化の捉え方を可変的で流動的な概念と捉えた<sup>1)</sup>。本稿では、サラマウンのこうした文化の多面的な捉え方を踏まえ、これまで同一視されてきた文化観光における、ホスト（観光される側）とゲスト（観光する側）との「オーセンティシティ (authenticity)」の捉え方を比較することを目的とする。「オーセンティシティ